



◆生育状況について

りんごの果実肥大は、概ね平年並みとなっているが縦長に伸びている。梅雨入りし、降雨日が増加する事から、薬剤散布については、細心の注意をはらって実施する。

◆当面する重点作業について

1. スモモヒメシンクイの防除(薬剤・耕種的)を徹底する。
2. カミキリムシ等の捕殺に努める。
3. 腐らん病の発生が目立つ。被害枝の除去を徹底して行う。凍害のあった樹は特に感染注意！！
4. 炭疽病・輪紋病・褐斑病等が感染する時期であり重要な防除なので、丁寧に散布する。
5. 収穫期の作物や、収穫間際の作物への農薬飛散には十分に注意する。
6. 見直し摘果を実施する。
7. 果実が大きくなり枝が下垂してくるので早めに枝つり、支柱立てを実施する。
8. 徒長枝の整理(日焼け防止に数本残す)をし、薬剤が樹冠内部まで浸透するよう作業を進める。

◆干ばつ・多雨対策について

降雨が少なく、晴天が7日以上続き乾燥状態になっている場合は、10a 当り、20～30mm程度の定期的なかん水を積極的に行い、玉肥大を促す。幼木に対しては特にかん水をこまめに行う。敷きワラを行い、水分ストレスを減らす。

少雨で土壌が乾燥するとカルシウム欠乏が発生しやすいので、必要に応じて葉面散布を行う。

降水量が多い場合は「根痛み」を防ぐために、排水対策をする。

特に新わい化栽培では、水が24時間以上溜まると水ストレスによる黄変落葉が発生する。

◆第8回薬剤散布について

1. 散布時期：6月25日（水）～6月29日（日） 散布日 月 日
2. 調 合 量：水1000l 当り ※混用順に記載。

農薬名	使用量	対象病虫害	収穫前
展 着 剤	10ml	—	—
エ ク シ レ ル S E	20ml	キンモンホソガ・シンクイムシ類	前日
ナ リ ア W D G	50g	輪紋病・炭そ病・斑点落葉病・すす斑病・すす点病・黒星病・褐斑病	前日

3. 散 布 量：10a 当り⇒5000l 以上

4. 散布上の留意事項

①病害は、雨による果実の濡れ時間が長く気温が高いほど多発する。

炭疽病の感染は降雨時の気温が高いほど(16℃以上)又、濡れ時間は10時間以上、特に24時間経過するような濡れの継続で飛躍的に感染量が増加する。

炭疽病、輪紋病の多い場合は、散布間隔を短くして実施する。

また、褐斑病の2次感染期となり、重要防除になる。散布量、散布ムラないように実施する。

②通常展着剤に代えて固着性展着剤アビオンE1,500倍(水1000l 当り 66ml)を使用してもよい。ただし薬剤は広がりにくいのでより散布ムラの無い様にする。

③シナノリップはシンクイムシの被害が多い。シンクイムシに対して効果の高い㊟サイハロン水和剤2,000倍(水1000l 当り 50g 収穫7日前まで・3回以内)を特別散布し、第7回から第9回までの散布

を10日間隔にしても良い。なお登録の幅が狭い薬剤（リンゴ・ナシ・モモのみ）の為、他品目への飛散には注意する。

- ④褐斑病の発生が心配な場合は、7月初旬にユニックス顆粒水和剤2,000倍（水100ℓ当り50g）を特別散布する。
- ④ハダニ類の発生が多い場合は、アカリタッチ乳剤1,000倍を加用散布又は特別散布する。なお、展着剤は不要。※高温時並びに展着剤使用で薬害が発生するため注意する。

◆褐斑病特別薬剤散布について

1. 散布時期：7月初旬頃（第8・9回の間） 散布日 月 日
2. 調合量：水100ℓ当り ※混用順に記載。

農薬名	使用量	対象病害虫	収穫前
展着剤	10mℓ	—	—
ユニックス顆粒水和剤	50g	褐斑病（・黒星病・斑点落葉病）	前日

3. 散布量：10a当り⇒500ℓ以上
4. 散布上の留意事項
- ①昨年、褐斑病の発生が多かった園や、発生が心配される園は、実施する。

◆カルシウム欠乏対策について

ビターピット・ジョナサンスポット、コルクスポット等カルシウム欠乏対策として、必要に応じて、下記内容により、葉面散布肥料を散布する。

1. 対策時期：継続して月に1回程度
2. 使用資材：

資材名	倍率	100ℓ当り使用量
ストピットⅡ	500倍	200g
スイカル	1,000倍	100g
カルビタ	1,000倍	100g
カルタス	500～1,000倍	200～100g

3. 注意事項：基本、カルシウム肥料とリン酸肥料は結合してしまうため混用しない。
ストピットⅡは、白くなるので収穫前の使用は控える。

◆苦土欠乏対策について

近年、苦土欠乏による黄変落葉が7月頃に発生することが多くなってきた。軽減対策として、下記を参考に対策を実施する。

1. 散布肥料：グリーントップ500倍（100ℓ当り200g）又はリーフマグ1,000倍（100ℓ当り100g）
2. 使用時期：6月に1～2回
3. 留意事項：単用散布を推奨するが、定期薬剤散布に混用してもよい。

◆園地の除草対策について

ナミハダニの発生予防、作業効率を上げるために園地の除草(刈取り)を励行する。

1. ダニ剤散布の3～5日前に下草刈を行うか除草剤により雑草を処理して、ハダニを樹上に上げてから散布する。樹上散布の後に除草剤散布や、草を刈り取ると事後の発生が多いので注意する。
2. 刈取り敷草化を基本におこなうが、根元は除草剤を使用しても良い。
3. 除草剤はバスタ液剤またはザクサ液剤を使用する（収穫21日前まで、年3回以内）
 - ①草丈30cm以下なら10a当り、水100～150ℓにバスタ液剤またはザクサ液剤を500ml処理する。一般雑草は300倍（10ℓ当り33ml）で使用する。
 - ②草丈があまり長いと効果が落ちる。
 - ③多年生(宿根性)雑草には140倍（10ℓ当り75ml）で散布する。
 - ④ワイ性樹などでは葉に飛散しないよう注意する。
 - ⑤ヒコバエ等を刈り取り後の傷口が治っていないうちに除草剤を散布すると傷口からも入り薬害となるので注意する。

◆ヒメボクトウガ対策について

1. 症状
 - 1) 数十匹の幼虫が樹幹内部を縦横無尽に激しく食害し、加害された樹は衰弱枯死する。
 - 2) 幼虫は樹の中で2～3年かけて成長する。虫フンを出した穴が多数ある。
 - 3) 蛹殻が半身を乗り出した格好で残されている。
 - 4) 成虫は6月下旬から8月上旬に発生する
2. 対策
 - 1) 食害が多い所は伐採する。
 - 2) 通常防除でも被害場所によくかかるように散布する。また被害に遭っていない幹にも丁寧に散布し予防する。
 - 3) スプレータイプの殺虫剤「ロビンフット」（収穫前日まで・年5回以内）を使用する。
虫フンを取り除いた所へノズルを差し込みながら噴射する。
薬液が逆流するまで（2～10秒）噴射する。
散布後苦しくなった幼虫が穴から出てくる（出できた幼虫も死にます）
幼虫が成長すると穴の長さが100cmにもなる場合があり、かかりにくくなるので食入初期に使用する。
カミキリムシへの効果もあるので合わせて実施する。

◆シナノリップ・サンつがる・早生品種の鳥害対策について

1. 基本的には、防鳥ネットを張り、鳥害を防ぐ。
2. 鳥よけ爆音機やバードガードを使用する。
なお使用する場合は周辺の環境に留意する。特に住宅地付近での使用や早朝・夜遅くの使用はやめる。住宅地より200m以上離れた所で使用する。
3. 被害にあった果実を取り除く。

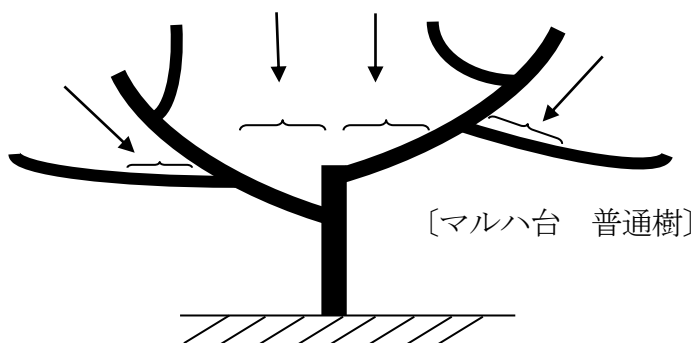
◆日焼け防止 白い寒冷紗の被覆について

1. 設置時期
 - 1) 温度が高くなり日焼けが発生しそうになる6月下旬頃から。遅くなっても設置して日焼け被害の程度を軽減させる。
2. 設置のメリット（日焼け軽減の他に）

- 1) 葉摘み・玉回し作業の時間帯が広がる。 2) 鳥よけ効果がある。
- 3) 降雹場合に被害軽減できる。 4) 作業時が涼しい（新わい化栽培は日影が無い）
3. デメリット
 - 1) 設置・撤去作業の手間。 2) ネットや支柱の費用がかかる。
 - 3) 着色がやや遅れる。 4) 通常作業に邪魔になる。
4. 設置前の注意
 - 1) トレリスや支柱の強度は十分あるか。
 - 2) 樹との空間を空けて設置できるようになっているか（作業面・風通しなど）
5. 設置してからの注意
 - 1) 台風や強風（風速20m以上）が吹く場合は、白寒冷紗を迅速に収納できるようにする。
 - 2) 白寒冷紗だけでは日焼け防止は不十分。かん水も併せて行い温度を下げる。
 - 3) 収穫中も設置し、8割程度収穫が終了したら取り外す。

◆新梢管理について

1. 主枝、亜主枝や側枝基部の徒長枝（新梢）は全部欠き取るのではなく、30cmに1本位で千鳥に残す。
⇒ 計画的に切り（欠き）取る。
2. 着果不足で樹勢の強い樹は、徒長枝をこの時期切らずに無駄な養分を発散させる。
お盆の頃に切り取る。
3. 殺ダニ剤散布に合わせ、徒長枝（新梢）の処分をする。⇒ 30cmに1本位ずつ千鳥で適宜に残す。
4. 図の矢印部分（主枝・亜主枝の基部）の新梢は強くなりやすいので欠き取る。



◆有袋ふじ袋かけについて

下記の日程を目安に準備を進める。果実への病虫害発生防止の為、薬剤散布をしてから袋かけを行なう。

品種	被袋時期	摘要
ふ じ	6月下旬～7月10日頃まで	一挙除袋用袋（有袋期間は85日位）

※ふじの一挙除袋用袋は、被袋が早いと地色が抜けすぎてかえって着色が遅れる。

※ふじ一挙除袋用袋は、作業が間に合っても早くかけ過ぎない

※ふじの一挙除袋用以外の袋は、被袋を上記より時期より10日早める。